

アメリカの分裂

多元文化社会についての所見

アーサー・

シュレージンガー, Jr. 著

ARTHUR M. SCHLESINGER, JR.

都留重人 監訳



岩波書店

アメリカの分裂

元文化社会についての所見

シュレーンガー, Jr. 著

ARTHUR M. SCHLESINGER, JR.

都留重人 監訳

岩波書店

アメリカの分裂

一九九二年六月二十九日 第一刷発行 ©

定価二〇〇〇円

(本体一九四二円)

監訳者 都留重人

発行者 安江良介

〒101-02 東京都千代田区一ツ橋二丁目五
発行所 株式会社 岩波書店

電話 〇三三六五四二(案内)

印刷・理想社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-000050-0

目次

序 説	1
第一章 「新しい人種」か	17
第二章 武器としての歴史	47
第三章 学校を舞台にした論争	89
第四章 アメリカの分解	129
第五章 多様ななかの単一	155
監訳者あとがき	183

序 説

冷戦の消滅は、イデオロギー抗争の時代に終止符を打った。しかし、予見されたことではあるが、歴史の歩みが止まったわけではない。ひとつの憎悪が次の憎悪に道を譲っただけである。東欧では、イデオロギー上の抑圧という押さえ蓋を開けた結果、過去の体験と記憶の中に深く根付いていた民族的敵対心が解き放たれている。第三世界では、イデオロギー面での競争が姿を消すことにより、国民的、部族的対決にたいする超大国による抑制が取り除かれている。イデオロギー抗争の時代が沈静化するにつれ、人類は、おそらくより一層危険な民族的、人種的憎しみ合いの時代に足を踏み入れている。より正確に言えば、再び足を踏み入れたと言うべきであろう。

序 説

なぜなら、部族間の相互的反感は、世界で最も古くから存在する事柄のひとつだからである。この地球の歴史の大部分は、人びとの混合の歴史であった。大量の移住は大量の敵対心を生み出す。とりわけ、よそ者にたいする恐怖心は、最も本能的な人間の反応なのだ。今日、二十世紀が終わろうとする時期を迎えて、冷戦の消滅だけでなく、更に視野を拡げて言うなら、迅速

な通信と輸送方法の発達、人口増加の加速化、伝統的社会構造の解体、絶望的な貧困と欠乏の持続、これらがひとつの力となって、国境を超える大量移民を刺激し、その結果、人びとの混合が、暗影に包まれた来たるべき世紀の主要問題となりそうなのである。

異なる言語を語り、異なる宗教を信仰し、民族起源を異にする人びとが、同じ地理的地域に居住し、同一の政治的主権のもとで生活するとき、一体そこに何が起ころであらうか。ひとつの共通の目的が人びとを結びつけないのであれば、部族的な敵対心が人びとを離れ離れにしてしまふだろう。今や、民族的、人種の抗争が、現代の爆発的な議論を呼ぶ係争点として、イデオロギー面での抗争に取って代わるであろうことは明白なのだ。

今日、どの側面からみても、民族性が国民分裂の原因となっている。ソ連邦、ユーゴスラヴィア、インド、エチオピアの諸国は、すでに危機を迎えている。民族的緊張が国情を不穏にし分裂へと招きつつある例として、スリランカ、ミャンマー、インドネシア、イラク、レバノン、イスラエル、キプロス、ソマリア、ナイジェリア、リベリア、アンゴラ、スーダン、ザイール、ガイアナ、トリニダード・トバゴがあり、例を挙げるのに事欠かない。イギリスやフランス、ベルギーやスペインやチェコスロヴァキアのような安定した文明国でさえが、民族的、人種的問題の深刻化に直面しているのである。『エコノミスト』誌の言葉を借りるなら、「部族主義というビルスは、国際政治のエイズとなる危険性をはらんでおり、長年休眠状態にあったのが、

今や再発して諸国を破壊せんばかりである。⁽¹⁾

われわれの北側の隣人を例にとってみよう。カナダは、最も分別のある静穩な国であると長いあいだ考えられてきた。「豊かで平和で、ほとんどの基準からみても、うらやましいほどにうまくいつている」はずであるのに、今日は「破綻の寸前にある」⁽²⁾と『エコノミスト』誌は書いているのだ。そして、マイケル・イグナチエフ（ロシア生まれのカナダ外交官の息子で英国に在住なので、現代人の混合の一例でもある）は、カナダについて次のように言う。「ここにわれわれは地球上五大富裕国のひとつをもっているのだが、それがあまりにも独特と言ってよい空間と機会に恵まれているため、世界中の貧しい人たちが入国を求めて扉をたたいており、おかげでこの国をばらばらにしかねない状態である。……もしも五大先進国のひとつである国が連邦的な多民族国家としてうまく機能できないのであれば、いったいどの国がそれをなしうるであろうか」⁽³⁾と。

この問いにたいする答えは、少なくとも最近までのところ、合衆国がそれだということであった。

ではアメリカ人は、どのようにしてこのほとんど前例のない芸当を見事にやってのけたのであろうか。他の国々には、民族的に多様な住民に、彼らが同一国民の一部であると自らが信じこめる確固とした理由を提供できないがために分裂が避け得ない。合衆国は、こうした理由

を今までのところ提供しえたからこそ、うまく機能してきたのだと言ってよい。そうだとすると、アメリカ人が、荒れに荒れた二百年にもわたって、共有の民族的起源を持たぬまま、一体性を確保し得たのは何故であろうか。それは、アメリカが最初から多民族国家であったからにほかならない。エクトール・サン・ジョン・ドウ・クレヴキョールは、一七五九年にフランスからアメリカ植民地へ移住し、アメリカ女性と結婚、ニューヨーク州のオレンジ郡で一農民として定住し、独立戦争の間に『アメリカ農民からの手紙』を出版した。この十八世紀のフランス系アメリカ人は、他の移民定住者たちの目を見張るばかりの多様性——「英国人、スコットランド人、アイルランド人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、そしてスエーデン人」といった具合に他のどの国でも見ることのできない「珍しい混血」に驚いたのである。

彼は或る家族を想起した。祖父が英国人で、その妻がオランダ人、その息子はフランス系女性と結婚、そして現在のその四人の息子たちは、それぞれ国籍の異なる女性と結婚していた。「この多種多様に混ざり合った血統から、現在のアメリカ人と呼ばれる人種が生まれたのだ」と彼は書いた。(十八世紀や十九世紀のころには、人種 race という言葉は、今日の国籍 nationality と同じ意味に使われ、したがって人びとは「英国人種」「ドイツ人種」等々と言っていた。)クレヴキョールが思いめぐらしたのは、突如出現したこのアメリカ人種の特徴は一体何であろうか、ということだった。『アメリカ農民からの手紙』には、次のような有名な問いか

けがある。すなわち、「では、アメリカ人、この新しい人間（*Yim*）とは何者なのか」というのだ。（二十世紀の読者は、女性の存在を全く気にかけていない男性を大目に見てやらねばならない。）

クレヴキョールは、自らが発した問いかけに古典的な解答をした。「その人間とは、要するにアメリカ人であり、彼はすべての古い偏見と風習を捨て去り、それらに代えて、受け容れた新しい生活様式、従うべき新しい政府、そして彼が保持する新しい地位等を受けとる。アメリカ人とは、新しい原理にもとづいて行動する新しい人間である。……ここでは、すべての国籍の個人が溶け合い、新しい人種となっているのだ」と。

多数の中の統一（*E pluribus unum*）。合衆国は、多民族社会が本来的にもつ分裂可能性にたいして見事な解決策をもっていた。すなわちそれは、全く新しい国民的アイデンティティを創造することであつて、この意識が、古い忠節を捨て去り新しい人生に参加することを通じて民族的差異を氷解させた個人たちによって推し進められたのである。自らの根源を断ち切つて荒波の立つ大西洋をもともしなかつた勇猛なヨーロッパ住民は、いまわしい過去を忘れ去り希望に満ちた未来を自らのものとすることを欲求した。彼らは、アメリカ人になることを期待したのである。彼らの目標は、離脱であり、解放であり、融合であつた。彼らにとってアメリカとは、陰うつな過去を忘却し、共通の政治的理想と共有する体験にもとづいて他に類をみない国民性

をつくりあげるべく自己改造中の国であった。アメリカがアメリカである所以は、古い文化を保存するのではなく、新しいアメリカ的文化を鍛えあげていくところにあった。

カナダが数多くの利点に恵まれているにもかかわらず、分裂にたいしてきわめて脆弱であるのは、彼ら独自の国民的自己同一意識を欠いているためであり、カナダ人も腹藏なくこのことを認めている。カナダ人は、イギリスやフランスや合衆国にさまざまな形で惹かれており、寛大な精神でもって多様な民族的遺産を大切にしているのだが、カナダ人であるということは何を意味するのかという点にかんしては、ついで強固な意識をつくりあげてこなかった。初代大統領であるジョン・マクドナルド卿の言葉を借りるなら、カナダは「広大な地理に恵まれすぎているが、歴史というものをほとんど持たない⁽⁵⁾」のである。

合衆国は豊富な歴史をもってきた。独立革命の時代以来、アメリカ人は強力な国民的信条を抱いてきている。強烈な国民的自己同一性の意識が、クレヴキョールの言う「ごたまぜの血統人種」を他国の場合に比べてうまく単一の人民に転換させ、かくして多民族社会を有効に機能させてきたのである。

そう言ったからといって、このことは、クレヴキョールの理想がすべて実現されたということと意味しはしない。新しい移民の波に乗り多くの人がびとがやってきたが、彼らは、ことばの上でも理念的にもあるいはまた制度面でも、免れようのない英国的である社会に対して、無器

用にしか適合できなかった。長期にわたって英国系アメリカ人がアメリカの文化と政治を支配したのであって、坩堝と言われながらもこの社会は、すべての人びとを溶かし込んだわけではなく、白人移民者であってもその誰もが融合できたというわけではなかった。

非白人系の人たち——アメリカの先住者でヨーロッパからの新参者による侵略・大虐殺の憂き目をみた人たち、あるいはアフリカやアジアから彼らの意思に反して連れてこられた人たち——にかんして言えば、深く根付いた人種的偏見が、これらの人たちすべて——レッド・アメリカン、ブラック・アメリカン、イエロー・アメリカン、ブラウン・アメリカン——を、ほぼ完全にのけ者扱いにしたのである。人種的偏見の災いは、アメリカの実験の最大の失敗、アメリカの理想の紛れもない矛盾であり、今日なおアメリカ人の生活を痛めつけている病症である。にもかかわらず、非白人系アメリカ人は、はじめな扱いを受けながらも、国民的自己同一性の意識の形成に貢献した。彼らは、三級の国民としてであるとは言え、アメリカ社会の構成員となり、共有の文化の中に新しい型と趣きを付与する手助けをした。非英国系民族の混入と新世界の体験が、着実に英国風の遺産を組み変えて、われわれの誰もが知っているように、合衆国を今日では英国と大いに異なる国にまで育てあげたのである。

アメリカについてのクレヴキョールの未来像は、合衆国の歴史のほぼ二百年を通じて広く受け容れられてきた。しかし、二十世紀は新しい反対の考え方を登場させたのである。ひとつの

世界大戦で古い秩序が破壊され、ウッドロー・ウィルソンの言う民族自決の教義が世に送り出された。そして二十年後には、第二の世界大戦が西欧の植民地諸帝国を解体させ、全世界で民族的人種的闘争心をいっそう掻きたてたのである。合衆国自体においても、新しい法律により、南アメリカ、アジアおよびアフリカからの移民の受け入れが緩和された結果、アメリカ国民の構成内容に変化が生じた。

クレヴキョールの頃には考えられなかったほど著しく混血化が進んだこの国において、彼がかつて提起した有名な問いかけが再び、今度は新しい感情を込めて問い直され、そして新しい答えを求めているのだ。今日、アメリカ人の多くは「人間の新しい人種」という歴史的目標に背を向けている。起源からの逃避が根源(*roots*)の探索に取って代わられたのである。クレヴキョールが否認した「旧来の偏見と様式」が驚くばかりの復活を示し、民族性の信仰が、非英国系白人のあいだにも非白人系少数派民族のあいだにも生まれることとなった。

民族意識の噴出は、数多くの良い結果をもたらした。アメリカ文化は、ようやくにして、英国支配真盛りの時代に見下げられ無視されてきた少数派民族の業績にたいして遅ればせながらも認識しはじめたし、アメリカにおける教育もまた、ようやくにして、ヨーロッパの彼方に大きく渦巻く世界の存在とその重要性を認めるにいたったのである。これらはすべて良いことであつた。言うまでもなく歴史は、さまざまな視点から教えられるべきである。子供たちには、

コロンブスの到着を、彼を送り出した人たちの観点からと同様に、彼をこの大陸で迎えた人たちの観点からも考えめぐらすことが出来るようにすべきであろう。アメリカ人は、ますます小さくなっていく地球上に住み、世界的規模でのリーダーシップ発揮の抱負をもつのであれば、他の人種、他の文化、そして他の大陸について、はるかに多くのことを学ばなければならない。そうすることによって、アメリカ人は、この世界について——そして自分自身のことに——かんしても——いっそう複合的であると同時に活気に満ちた意識を身に付けることができるのである。

しかし、民族性の信仰は、それが行き過ぎることから、好ましくない帰結をも生むにいたった。新しい民族本位の信条は、すべての国からの個人が溶け合って新しい人種になるというクレヴキョールの未来像を受けつけない。その根底にある基本的な考え方は、アメリカが個人から成る国ではなく集団の形成する国であるということ、民族性こそが大部分のアメリカ人の自己確認のできる体験であるということ、民族としての結合は永遠に消し去れないものであること、そして民族的集団への分割がアメリカ社会の基本構造とアメリカ史の基礎的意義を確立するものだ、ということなのである。

この基本的考え方の含意は、すべてのアメリカ人を民族的・人種の基準に従って分類しようということである。しかし、アメリカ史の民族論的解釈は、経済的歴史解釈と同様に、ある程度は有効であり説明に役立つとはいうものの、それを全体像として提起するとすると、致命的

に人を誤らせるし、また間違いをおかすこともなる。そのうえ更に、民族論的解釈は、アメリカの歴史理論——今日まで何とかアメリカ社会を支えてきた理論——をひっくり返すことになる。

すなわち、アメリカを独自の自己同一性意識をもって変化していく国として見るのではなく、この新しい考え方によると、多種多様で異質な複数の自己同一性を保持していく国であるという意識がますます強くなる。言い換えると、アメリカは、誰からも邪魔されることなく自由に自らの選択ができる個人によって構成される国ではなく、多かれ少なかれ民族的性格の中に深く根付いている集団によって構成されている国であるとの自己認識が強化される。多民族主義の信条は、歴史的な目的を捨て去り、同化を分裂に、統合を分離に置き換える。そして、「統一」(unity)を見下して「多数」(pluribus)を賛美する。

超越的かつ統合的なアメリカの自己同一性という歴史的な考え方は、今や多くの分野——われわれの政治、われわれの自発的な組織、われわれの教会、われわれの言語——において危険にさらされている。そして、われわれの教育制度におけるほどに、国民的同一性を主眼とする信念への浸蝕が決定的重要性をもっている分野は他にないのである。

わが共和国の学校や大学は、将来の市民を訓練するところである。とりわけわれわれの初等・中等学校は、「ひとつの人民」という理想を伝達していくための歴史的なメカニズムであ

った。生徒たちの学校で教えられることが、彼らが成人してから他のアメリカ人をどのようにみなしどのように扱うかや、わが共和国の目的をどのように理解するかに影響を及ぼすことになる。カリキュラムについての討論は、アメリカ人であることは何を意味するかについての討論にはかならない。

民族性を強く主張する人たちは現在、公的教育の主目的は、民族的起源と自己同一性の擁護と強化、賞揚と永続化であるべきだ、と強調する。しかしながら、分離主義は差異を誇張し敵対心を煽る。その結果として増大する民族的・人種的抗争のおかげで、「多民族主義」や「政治的妥当性」について、あるいは「ヨーロッパ中心」的カリキュラムの不法性についての騒々しい議論があり、更には、歴史や文学の教育は知的な訓練としてではなく少数派民族の自尊心を高める療法であるべきだという考え方についての論争がみられるのである。

これで良いのであろうか。民族性を強く主張する人たちは、社会が別個かつ不易の民族的・人種的集団に分けられて、そのそれぞれが他者との違いを大切にしよう教えられるような事態に、危険を感じないのであろうか。究極的に問題になるのは、アメリカの将来の姿である。中枢はゆるぎないであろうか。それとも、坍塌と呼ばれたものはバベルの塔に取って代わられるのであろうか。

私は、これらの事態の展開にかんして黙示録的な予言をしようとは思わない。教育の問題と

なると、常に変化の過程にあるのが普通で、それは良いこともある。学校や大学は、いつの時にも信念や哲学や価値にかんする論争にとつての戦場であつた。私は自信をもって言うが、われわれの大学における状況は間もなく、いったん声なき多数の教授連が「もうたくさんだ」と叫んで彼らが流行に過ぎぬナンセンスと知る事柄にいどむ気になりさえすれば、正しくもとへ戻るにちがいない。

民族的・人種的圧力がわが国の公的学校に及ぼす影響のほうは、もっと厄介である。国民的結合力という絆は、すでにかんりの程度もろくなつてゐる。公的教育は、この絆を弱めるのではなく、強めることを目指すべきである。もしも分離主義的傾向が抑制されないまま続くのであれば、その結果は、アメリカの生活に分裂と再隔離と部族化をもたらすだけであらう。

私は依然として事態を樂觀している。私の印象では、「ひとつの人民」の実現を目指す歴史的な力はその勢いを失つてはいない。大部分のアメリカ人にとり、これが依然としてわが共和国のもつ意味なのだ。彼らは、「統一こそが第一」という立場と「民族性こそが第一」という立場とのあいだの議論で、いずれかの極端に走ることは抵抗する。マリオ・クオモ知事がいみじくも言つたように、「大部分のアメリカ人は、内容豊かな多様性を認識してそれを助長する必要のあることを理解しうると同時に、他方では、そのような視野の広い多元文化的展望が、アメリカ人であることは何を意味するかについての強化された自覺とともに、国民を統一の方

向へ導いて、われわれをばらばらにしてしまうような破壊的党派主義を生んではならない、という点も十分に承知していると思われる⁽⁶⁾」

彼らの自薦代弁者たちが何と言おうとも、少数派民族集団に生まれたアメリカ人の大半は、白人系であるか非白人系であるかを問わず、特定の伝統遺産を大切にする一方で、依然として自らを第一にはアメリカ人とみなし、アイルランド人とかハンガリー人、ユダヤ人とかアフリカ人とかアジア人とは考えていない。そのことの雄弁な証左は、民族や宗教の境界、更には人種の境界(増える傾向にある)さえをも越えての結婚が増えていることである。独特のアメリカ的自己同一性への信心は到底消滅したとは言えない。

しかし、国を統一する責務は少数派民族だけに課せられているのではない。同化と統合は双方向的なものである。アメリカへの参入を欲する人たちは、すでにアメリカを自己のものと考えている人たちによっても受け容れられ歓迎されなければならない。人種差別は、私がすでに指摘したように、大きな国民的悲劇であった。最近になって白人系アメリカ人は、ようやくにして、われわれの歴史に深く恥ずべき形で根付いてきた人種差別に対決する姿勢を見せはじめてはいる。しかし、人種差別を完全に打ち負かしてはいない。たとえば古くからここに住んでいたアメリカ人が、他の国籍や他の人種の人たちを、付き合いを避けたり拒んだりする、なじめぬ相手として扱うのであれば、少数派民族の人びとが憎しみに満ちて自閉的に集まり自分た